

「汝を棄てたまわぬ神」

2017・08・06 (説教17321798)

「焼野のきぎす夜の鶴」という諺があります。「きぎす」とはキジのことです。野原に火事が起こりますと、火からわが身を守るために、野に棲む生き物たちがいっせいに逃げます。ところがどういうわけか、焼け跡から雉の死骸が発見される。この鳥は どうして逃げなかったのだろうと、不思議に思った昔の人がそっと雉の死骸を持ち上げてみると、その下から生きてままだのヒナが出てきた。そうかこの雉は巣に残ったヒナを守るために、たとえ身が焼かれても巣から離れなかったのだ。それを「焼野の雉」と申しまして、子を守り慈しむ親の愛の譬えとなったわけです。万葉集にも「銀も黄金も玉もなにせむにまされる宝子にしかめやも」という山上憶良の歌があります。世の中の人金は金や銀や宝石の類を貴ぶけれども、そのようなものより遥かにまさる本当の宝は子供たちである。子供たちの尊さに較べるならこの世の宝など物の数ではないと万葉の人は歌ったのです。

そこで、現代社会においてはどうか。そのような古来の親の愛の譬えに反するような、残念な出来事が少なくありません。家庭内における児童虐待致死事件、パチンコ店の駐車場に幼子を置き去りにして熱中症で死なせてしまう、あるいは再婚の際の連れ子を邪険にして飢死にさせる、そのような、親たる者の本義に叛くような不祥事が報じられています。しかしそれでもやはり、世の中において決してありえないことの一つの確かなしるしとして、親がわが子を見棄てるということがあるのです。親がわが子を見捨てる。それは時代がいかにも変わろうとも、ありえないこと、あってはならないことの、最も確かな譬えなのです。

私たちの主イエス・キリストは、今朝お読みたヨハネ伝 14 章 18 節において「わたしはあなたがたを捨てて孤児とはしない」とはっきりと約束して下さいました。この「孤児」とは元のギリシヤ語を直訳するなら「見棄てられた子たち」という意味です。「わたしは、あなたがたを捨てて、見棄てられた子たちとは決してしない」と主ははっきりと言われるのです。ある意味でこれは私たちに“よくわかる”言葉です。「焼野の雉」の譬えすらあることですから、ましてや慈しみに富みたまう主イエスは、私たちを「見棄てられた子たち」などになさるはずはない。逆に言うなら私たちは、それは「当然のことだ」と思っています。さらにその「当然」という思いを穿つならば、自分は神に愛されて当然の存在であると、自分は神に見捨てられることなどありえないという自己評価・自己認識が私たちの心の中にあるのではないのでしょうか。

試みに、いま私たち自らに問うてみたら良いかもしれません。「わたしはあなたがたを捨てて孤児とはしない」という今朝の御言葉を聴いて、私たちの心の中に驚きがあったのでしょうか？。この御言葉を聞いて、私たちの何人が感動し涙を流したでしょう

か。むしろ私たちは「当然のことだ」としか感じていないのではないのでしょうか。もしそうだとしたら、私たちは今朝の御言葉を神の言葉としてではなく人間の言葉として聴いています。言い換えるなら、これは何もキリストの言葉でなくても納得できるものなのです。

ここで、全く逆のことを考えてみるとよいかも知れません。もしここで主イエスが私たちに「わたしはあなたがたを捨てて孤児とする」と言われたなら、私たちはどう思うでしょうか。「それはひどい」と誰もが感じるでしょう。主イエスともあろうかたがと不審を抱き、戸惑いを感じるでしょう。「そんなイエス様にはもうついて行けない」と思うでしょう。言い換えるなら、私たちはことほど左様に自分中心にしか御言葉を聞いていないのではないのでしょうか。私たちは御言葉によって碎かれる前に、まず御言葉を自分の尺度に当てはめようとしていることがいかに多いことでしょうか。

横浜のあるミッションスクールで宗教主任をしている人が、中学一年の女子生徒たちに「イエス様の、ここが好き、ここが嫌い」というアンケートを書かせました。すると「ここが嫌い」という回答のほうが倍ぐらい多かった。いちばん多かったのは「偉そうにふるまう」「よくわからない話をする」「自分がキリストだと見せつけている」というものだった。中には「不潔そう」「あのロングヘアをシャンプーしたい」というのもあったそうです。それには「勝手にシャンプーしなさい」という宗教主任のコメントがありました。それに対して「イエス様のここが好き」という回答でいちばん多かったものは「いつも一緒にいてくれる」「やさしい」「何でも許してくれる」というものだったそうです。改めて、ミッションスクールの宗教主任の苦勞を思うと同時に、現代の女子中学生が主イエスについて抱いている素直な印象が聞けました。そして一つのことを考えさせられました。

それは、教会に連なり信仰生活をしている私たちは、もちろん「イエス様のここが嫌い」とは申しません。「シャンプーしてやりたい」とも言わないでしょう。しかし「いつも一緒にいてくれる」からイエスさまが「好き」だと、この女子中学生たちのように、素直にはっきり言いうる信仰生活を私たちは、いつもしているのでしょうか。また「ここが嫌い」という子供たちの思いを即座に打ち消してあげられるだけの、キリストと共にある信仰生活を私たちは、いつもしているのでしょうか。言い換えるなら「わたしはあなたがたを捨てて孤児とはしない」と、主イエスが言われたことを、当然のこととしてではなく、大きな恵みとして、福音の喜びとして、祝福として、私たちは聴き取っているか否かをいつも問われているように思うのです。

今朝あわせてお読みした旧約の詩篇 27 篇 10 節に「たとい父母がわたしを捨てても、主がわたしを迎えられるでしょう」とありました。この詩篇 27 篇は、家臣であり將軍であるウリヤの妻バテセバを、姦計を用いてわが手中にするという大きな罪をおかしたイスラエルの王ダビデが、その罪をただ神によって贖われ赦された喜びと感謝を献げているものです。その中でダビデは「たとえわが父母われを棄つるとも、主われ

を迎え給わん」と歌っているのです。ダビデは、自分がおかしたあの大きな罪は、たとえ自分の父母に呪われ棄てられても仕方のないほどのものと言うのです。それは、ありえないこと、あってはならぬことが、実際に起こったのです。神によって造られ祝福された人生が、自分の罪によって破壊され生命を失ったことです。それは存在そのものの意味を失うことです。そしてその罪は、ただあらゆる人間関係の崩壊だけにとどまらない。それは本当には神との関係の崩壊に繋がるのです。神の愛に応えて生きるべき人間が、その関係性を喪失するとき、肉体だけではなく魂が滅びるのです。それを聖書では「からだの滅び」と言います。その意味でダビデの「からだ」は滅びたのです。彼の肉体にも魂にも死が纏わりついているのです。使徒パウロ、かつてのパリサイ人サウロもその「からだの滅び」を経験しました。それはローマ書 7 章 24 節において「わたしは何というみじめな人間なのだろう」と叫んだ、あのサウロの叫びにあらわれています。

そのような私たちの世界に、主なる神は御子イエス・キリストによって、はっきりと、大いなる救いと恵みの約束を与えておられます。「たとい父母われを棄つとも、主われを迎え給わん」と。ここに主は力強く仰せになる。「わたしはあなたがたを捨てて孤児とはしない」と！。あなたがたを、この滅びの罪の「からだ」である世界を「見棄てられた子たち」には決してしないと主イエスは約束して下さい。そこに、私たちの本当の救い、本当の平和と喜びがあるのです。

「母を尋ねて三千里」という物語があります。マルコという一人の少年が生き別れになった母親を尋ねて辛い旅を重ね、ついに母子が再会して幸せに暮らすという物語です。私たち人間はこの物語と同じように、まことの神を尋ねて旅をしている存在なのです。19 世紀スウェーデンの牧師であり宗教哲学者であったゼーデルブロームという人は「人類の歴史はまことの神を尋ねて旅する旅人の歴史である」と語りました。人間は誰でも例外なく、まことの神を尋ねて魂の旅路をさ迷っている存在なのです。それは真の神を尋ねる旅路ですから、真の神に出会うまでは決して平安をえることのない旅路です。これをアウグスティヌスは「告白」という本の冒頭でこう語りました。「神よ、あなたは私たちをただあなたへと向けお造りになった。それゆえ私たちは、あなたを見いだし、あなたのもとに憩うまでは、決して休みをえることがない」。

「わたしはあなたがたを捨てて孤児とはしない」。これは「当然の」言葉などではないのです。この御言葉の中には、十字架の主イエス・キリストの測り知れない十字架の重みがこめられているのです。すなわち神に棄てられてこそ「当然」であるほどの矛盾、根本的な「からだ」の滅びを抱えた私たちの存在、そしてその私たちが生み出すこの世界が、その罪の「からだ」のままに、十字架の主イエス・キリストによって贖い取られ、その全ての罪を赦され、義とせられ、永遠の生命を与えられた出来事です。十字架の主による罪の贖いの出来事です。まことの神から離れ、まことの神に叛き、まことの神に立ち帰る道さえ知らないでいる私たちのために、まことの神みずからが、ご自分を全く空しくされ、人となって、私たちの罪のただ中に降りて来て下さ

った。そこにおいて、私たちの罪のために呪いの十字架を担われ、ご自分の肉を裂かれ血を流したもうて、私たちの赦しと贖いを成しとげて下さった。ただこの十字架の主イエス・キリストの恵みによってのみ、私たちは今朝の御言葉を、まさしく私たちの「からだ」のよみがえりと祝福を告げる、福音のおとずれとして聴きうるのです。

「わたしはあなたがたを捨てて孤児とはしない」。これこそまさしく、私たちのために十字架の上に生命を献げて下さった贖い主の約束です。それは何にもまして確かな救いであり、祝福であり、永遠の生命の約束なのです。「焼野のきぎす」どころではない。主イエス・キリストは神の御子でありつつ、ご自分の全てを献げて私たちの滅びを担い取って下さったのです。私たちに復活の生命を与えて下さったのです。その最も確かなしるしこそ教会です。教会はキリストの復活の御身体の歴史における現れです。そしてこの礼拝は、三位一体なる神との聖なる交わりの内に、私たちが御言葉と聖霊によって新たされる幸いです。そこから、新しい人生の歩みへと、私たちは遣わされてゆくのです。祈りましょう。